



巨大災害の世紀を生き抜く

広瀬弘忠・著／集英社新書

「21世紀は複合災害の世紀だ」――

著者は、東日本大震災を例に現代の災害を複合災害として捉え、「災害と情報」、「災害弾力性」など、様々な視点から災害を乗り越えるためのヒントを論じている。また、複合災害を乗り越え、生き抜くための行動指針について、災害心理学の第一人者として検証している。

市民の安全と命を守るためには、何が必要であり、どう行動すべきなのか。今回の震災を教訓として、私たち公務員が今後の安全・安心について考え直すきっかけとヒントが詰まった一冊でもある。

(ま)



奇跡の災害ボランティア 「石巻モデル」

中原一歩・著／朝日新書

東日本大震災では、多くのボランティアが被災地で力を発揮した。本書は、石巻市がボランティアの受け入れを積極的に行い、その活用で成功した事例を「石巻モデル」として紹介している。特に被災直後には、多くの被災自治体がボランティアを有効に活用できない状況の中、石巻市では、行政・地元関係者・NGO（NPO）・社会福祉協議会が連携し、ボランティアによる組織的な活動の継続に成功したとしている。災害時にボランティアの力が不可欠あることは言うまでもない。「善意」をどう受け入れ、活用するか、実効性ある仕組みづくりに向け、有用な事例を提供している。

(の)



前へ！

―東日本大震災と戦った 無名戦士たちの記録―

麻生幾・著／新潮社

防災計画は、災害時の状況をどれだけ想定できるかということが重要なポイントになる。

3. 11を経験して思うのは、自然災害では、我々の想定範囲を超える事態の発生が常に起こり得るということだ。今回の災害を教訓として、防災計画の見直しが図られていくことになるだろう。

この本「前へ！」は、3. 11、とりわけ福島原発や寸断された道路への対応の様子を、臨場感とともに伝えている。

災害の現場で何が起きていたのか。職員はどう立ち向かったのか。それらを知ることは、災害現場への想像力を養うのに役立つに違いない。

(た)



首都圏大震災 その予測と減災

角田史雄・著／講談社+α文庫

本書の前半は地球全体を俯瞰してマグマの動きや熱エネルギー、火山の活動から地震の発生メカニズムを解説するなど、学問書特有の読みにくさはあるが、後半になると首都圏、特に埼玉県における地震について詳しく分析し、その対策を示唆している。

著者は、埼玉大学工学部の名誉教授で、県内在住ということもあり、埼玉県内の断層を詳しく分析し、県内に実在する中学や高校の地震リスクについても解説している。自分の家や職場のある土地に地震の巣があったりしないだろうか気になる人はもちろん、県内の自治体職員なら是非読んでおきたい1冊である。

(ひ)



**地震の日本史
大地は何を語るのか 増補版**

寒川旭・著／中央公論新書

日本列島は太古から現代まで、かくも多くの大地震に見舞われてきたのか、ということが分かる一冊。

阪神・淡路大震災の前には「関西に大地震はない」という風説が浸透していたという。同様に、埼玉県の地震対策という、私はつい東海地震や東京湾北部地震が起こった場合を想定するものと思い込んでいた。しかし本著を読むと、埼玉県内を震源とする大地震も起こりうる。それを前提とした対策も考えなければならないと思うようになった。

また、大地震が起こるたび、人々は助け合い励まし合って生活を再建し、地域を復興させていった。そんな歴史を知ると、読むだけで力づけられる。(龍)



**風評被害
そのメカニズムを考える**

関谷直也・著／光文社新書

東日本大震災、そしてそれに続いて発生した福島第一原発事故による農水産物の「風評被害」。それは本県でも発生し、少なからず被害をもたらした。

本書では、「所沢ダイオキシン報道」や過去の原子力事故などを例に挙げ、風評被害は「報道」と人々の安全を求める心理によって発生すると説き、その構造について論じている。

私たちが風評被害の「加害者」にならないために、著者は「人々が普段通りの生活を送ることで経済を回していること」そして「市場に出回っている『安全』な商品を積極的に、もしくは粛々と購入すること」が大切であると述べている。(に)



**防災の決め手
「災害エスノグラフィー」
阪神・淡路大震災秘められた証言**

林春男・田中聡・重川希志
ほか著／日本放送出版協会

情報がなく判断に迷いながら救助を続けた消防士。壮絶な遺体安置所を任された職員。混乱を極める避難所を運営した職員。いずれも17年前、阪神・淡路大震災で修羅場を経験した神戸市職員である。

災害現場に突然放り込まれ、自分の判断に苦悩し、凄惨な記憶に口を閉ざす職員が多い。

しかし本書はエスノグラフィーという民俗学の手法を用い、心の葛藤をそのままに当事者の体験による記録を綴る。

どんな専門書もかなわない真実の記録。東日本大震災でもこの手法による検証を期待する。(え)



実践 自治体の危機管理

田中正博・著／時事通信社

阪神・淡路大震災以降、「危機管理」という言葉が自治体においても盛んに用いられるようになった。

東日本大震災では、かつてない被害をもたらされ、自治体として、更に危機管理意識は高まった。

しかし、行政の危機管理とは、なにも自然災害やテロ対策だけではない。社会、住民からの不信感を買うような、いわゆる「不祥事の防止」も重要な危機管理である。本書では、自治体にとっての危機管理の要諦を具体例を用いてわかりやすく解説しており、「転ばぬ先の杖」として、予防できる危機を回避するために実践的な立場からまとめられている。自治体職員に一読を勧めたい。(さ)